

風

韻

第 二 号

(1962年度)

神 戸 大 学 風 韻 会



〔「定家」を舞う宇治正夫師範〕

風韻 第2号 目次

巻頭言「風韻の心」	師範	宇治正夫	1
考えていること	副会長	荒川祐吉	2
風韻会45周年記念に寄せて	顧問	柚木馨	3
六甲台と謡曲	32年卒	上野孝純	4
「日記」は語る	34年卒	上竹原康宏	7
“謡い” 雑感	35年卒	有田直行	9
誌上研究室			
「能楽の現代に課せられた一問題点」	J 10	永田守男	11
現代人の精神力	E 10	左鴻秋義	15
謡曲ショート・ショート	E 10	中島圭吾	16
お能と金閣寺	E 11	形部靖	18
学連雑感	E 11	久下昌男	19
かけだし	E 10	山本閏一	20
謡曲史跡めぐり(一)「敦盛」	E 11	前田紀一郎	22
Y 君 へ	E 10	山口隆夫	24
謡と仕舞とわたし	L 11	松村喜代子	24
旅行記「紅葉狩」の舞台—戸隠山	B 11	井上文男	25
思いつくままに	E 10	山口久之	26
昭和36年度風韻会活動総括及び37年度予定			28
神戸大学風韻会々員名簿			32
編集後記			44

表紙題字は宇治正夫師範筆

言 頭 卷

風 韻 の 心

師 範 宇 治 正 夫

人間の一番幸福な時はどんな時でしょうか。私の考えでは何事でも一心になれた時、自分の全生命、全精力を打ち込んだ時ではないかと思えます。仮に休重、力量が互角であって、理想の力士が相撲する時、はじめはやはり勝たんとする心によって立つとしても、四つに組んだ時には勝敗などは念願になく、何も考えるなどという余裕はなくなると思うのであります。又自分よりはるかに勝れた人に向った時も然りと思えます。

語なり能なりはこの瞬間の境地と同じ境地に、しかも長時間浸りきるものと思えます。いつも曲中のあらゆる人あるいは事象に取り組んで無我の境地に浸ることはいかに幸福であり、又痛快ではありませんか。曲柄、位、緩急等あらゆる条件は無視することはできませんが、これを体得しても又知らぬでも、同じ気持に浸ることは難事ではありません。

よって、どんな境遇の人でもこの幸福は必ずすぐにつかめるものであり、会う人ごとに勧める所以であります。

(談)



神戸大学文化フェスティバル
昭和36年11月30日(木) 於 神戸国際会館
舞囃子 「清経」 永田守男



谷垣先輩及び現役一同
第10回大学祭・講堂横にて 昭和36年5月15日(日)

考えていること

副会長 荒川祐吉

私が藤井先生のおすめ宇治先生の下へ入門させて頂き謡曲を習いはじめてからはや七年程たった。その間一年程病気で休んだり、またここ二年程は多忙を口実に十分の稽古もせず過ぎたため正味四年程しか修業をしていないわけである。宇治先生の御蔭で九番習の免許状は頂戴したけれども、未だに節は譜えても調子は十分のみこめていず、まして曲趣を織込んで誦うなどという段階には程遠い状態である。一生懸命修業しているときは考えないのだが今のよう一寸わきみをしているといろんなことが考えられる。近頃特に意識するようになったことは、芸の修業と学習の修業さらにはおおよそ修業といわれる過程には必ず共通したものがあるのでないかということである。

誰でもはじめは割合楽な気持ちでその道に入る。しばらくするとどうもうまく楽々と進まないのが相当部分の人はここでやめてしまふ。一歩進むための努力をするより簡単にやめるといふ安易な途を選ぶのである。この段階をすぎた人は、一応努力をする。又いろいろ工夫もする。良き師にめぐりあえば本人の素質と努力とで一応の水準にまで比較的短期に大して苦しまずに到達することができる。しかし本当の学問、本当の芸道は、ここが出发点であるにすぎない。しかもこの段階から一歩踏み出すための障壁は驚くべく堅固である。

ある。全力を尽してぶつかって尙且容易に貫通することはできない。大抵の人はこの壁をうち破ることができないまま諦観？してしまつて小成に安んじることとなる。この壁を打破りうるためには、強烈な執念と全エネルギーの集中とがなければならぬ。それによつてはじめて学者は真にその名に値する業績を樹立することができる。芸も同じことである。小成に安んじている限り、どこまでも目那芸に過ぎない。大抵の素人はどこまでも趣味として芸事を習う。そして趣味であるということにこだわりを持っている。たとえ趣味であっても修業は修業である。むしろ趣味という意識を放棄しなければ大成への障壁は到底打破することはできないであらう。

現在のわたしは学問に於ても、謡に於てもはなはだけな小成の段階では一休みしているような状態である。雑事に煩わされて全力集注が困難になつていふ事情もある。しかしこれは最低の状態であることはわたし自身痛感するところである。よく日本の学者は教授になり博士になつたら勉強しなくなるといわれる。事実このようなケースが非常に多い。しかしこれでは本人自身のためにも、又社会のためにも大きな損失である。学問も芸道も道は一つ人格の完成と真理の体得へと連なつていふ。もともとよい加減な気持ちで途中でとりやめにして済むものではない。少なくともわたしはよい加減のところで勉強しなくなるような「学者」先生の轍は踏みたくなふと思つていふ。今、中途半端に過ぎてきたここ数年を顧みて反省の念が強い。此度は留学を期に自分の学問にも、又謡の修業にも新しい気持ちで真剣に取り組みたいと念じていふ。

自分自身の至らない反省を以て紙面を汚したことを最後におわび

風韻会四十五周年

記念に寄せて

顧問 柚木馨

しておきたい。風韻会も今年には四十五周年を迎えるとのこと、わたしはいわば大学を卒業してから入つた新参者ですが心から会の隆盛を祝し又祈願するものです。

一九六二年一月十五日

渡米を前にして

(神戸大学経営学部教授)

神戸大学風韻会三十周年記念大会のお知らせ

昭和三十七年を以て神戸大学風韻会は満三十才となります。ります。

昭和七年に宇治師範を本学にお迎えして以来幾星霜、将に宇治先生は神戸大学風韻会の年輪と言ひ得ましよう。この三十年を顧るとともに、先生の御熱意に感謝する意味において、来る十一月にその記念大会を、本学講堂にて催したいと考えています。

先輩諸兄の御協力をお願いする次第です。

尚期日その他詳細は追つてお知らせします。

風韻会は今年で四十五周年の星霜を生き抜いてきて、その記念の大会の一つが三月十八日に大槻能楽堂で盛大に催されることとなつた。この雑誌が世に生まれる頃には、もうこの大会も終つて社中は楽しかつたその日の追憶に花を咲かせていることであらう。一口に四十五年というけれども、それは一世紀の半ばに近いことを示しているものであつて、私の年で逆算すると、私の中学校三年の時に風韻会は生まれたこととなる。丁度第一次世界大戦が終る前年のことであつて、その年の三月にはロシアに革命が起つてロマノフ王朝は滅亡し、翌一九一八年にはドイツ革命におけるホーエンツォルレン王朝の滅亡によつて第一次大戦は終結したのであつた。爾来、世界は民主主義とファシズム、共産主義と資本主義との斗争に明け暮れて、人々は平和と安住とを忘却してしまつたかに見える。風韻会はこのような波らんの中に生まれ、このような斗争の歴史の中に生き抜いてきて、しかも年と共にその盛大を加えてきたのである。そして、その時代の荒々しさの中に神韻ひょうびようたる古典音楽によつて人々の心の中に平和と安住の喜びをよび起させてきたのであつた。主宰者宇治先生の功績は誠に偉大なものがあるのであり、それだけにこの年を迎えての先生の満足はさぞかしと思われる。

しかし、この四十五年という星霜は私にとつてもまた物心を覚え

てからの全生涯であって、私はいわば風韻会と共にこの半世紀を悪戦苦闘してきた訳である。私が風韻会にいられたのは神戸商大助教授の頃だったと思う。境遇の変化もありこれにむら気も手伝って、その頃私は風韻会に、あるいは現役として、あるいは予備役として、時には後備役に編入されたりして、関係を保ってきたのであったが、昨年頃からまた現役に復帰して統の操法から習い返すこととなった。そして、風韻会が四十五周年を祝うこの年に私は還暦の喜びを味わうこととなった。この大会で私が正尊をひらかせてもらうのは、一部にはこの還暦を記念する意味を私自身では考えていたことであつた。私は今物心ついてからの四十五年をしみじみと回想している。随分永かつたとも思うし、全くアツという間だったという思いもする。ほんとはどちらなのであろうか。そして宇治先生はこの四十五年の経過にどんな感想を抱いておられるであろうか。聞いてみたいものである。

(神戸大学法学部教授)



ゆさぶっていたのである。そして、一週間も経たぬ中に、仲間の四、五人と何とはなしに、あのお世辞にも綺麗とは言いかねる集会所の畳の上に坐つて、「それ清陽の春に成れば」と、余り可愛くない口を揃えて、蜜声を挙げ始めていたのである。茲来、謡と私の縁は、切れそうで切れぬものと成つて了つたのである。

半月も経たぬ中に、三織劇場に於る関西学生能楽連盟秋季大会に参加し、初めて扇子を持って、シビレを経験したのである。翌年の春には、「羽衣」の連吟で三回生諸兄を送り出し、春季大会、六甲山での夏季合宿を経れば、早や就職、卒論に忙しい四回生に代つて秋季大会の開催の任を背はせられていたのである。五回生で臨んだ湊川神社の学連秋季大会で、はやる馬を抑える騎手の如く、又腰を上げたがらぬ牛を引つ張る牛飼の如く、冷汗を流し乍ら地頭の役を初めて果し、その任の難しさを味つた。上級生の巢立つた後は、神大風韻会の存続は危いのではないかと、一時は危惧された程であつたが、その日以来、人気の無い集会所で壁に向つて坐り声の囁る迄稽古に励んだのであつた。そのお蔭か、例年春風の訪れと共に催される卒業生送別謡会では、卒業生を圧倒せんばかりの謡いぶりで、何よりの饒けと卒業生も喜んで巢立つて行つてくれる程に成張したのである。

新メンバーに依る対外初出演は、生田神社に於る関学謡曲部の春季大会で、この時は、全員無本で「俊成忠度」を出し、若い乍らも統制のとれた謡いぶりで、対手を感嘆せしめ、ますますの出来であ

六甲台と謡曲

三十二年卒 上野 孝純

早いもので、六甲台を巢立つて満五年である。阪急六甲よりケール下迄の坂道の風情も可成り変つて了つた。アメリカン・スクールの跡には、住宅公園の六甲台団地が誕生し、鉄筋コンクリート四階建のアパートが林立し、洒落れたセーターを着た夫君が愛児を抱いて、スラックス姿の妻君と買物に出かける等々、お馴染みの団地風景を展開している。

六甲ハイソの台地は、雑草が生い茂り、占領軍駐在時代のよく手入れの行き届いた芝生を知る者にとっては、全く悲喜交々の風景である。その荒廃の中には、あの名曲「井筒」に謡い上げられた寂莫たる廃墟の中に潜む幽玄の境とはおおよそ異り、尼御前の坊主頭の髪が伸び放題に成つたかの様に、唯不潔感が漂っている丈である。

八年前の六甲台は、緑の芝生の中に、赤や青の屋根が点在し、G Iの金髪が彩りを添え、一種の租界風景を展開していた。

六甲台と言えば、校門よりアメリカン・スクールの坂道を歩く度に、学生集会所より聞える地謡の低音の響きを想い起さずには居られない。六甲台へ上つたばかりの、ある秋の昼下り、晴れ渡つた碧空に浮ぶ白雲と、内外国の船が碇泊する神戸港を眺め乍ら、あの校門から続くダラダラ坂を歩く私の鼓膜を、謡曲独特の響きが毎日

つた。然し、関西学連の春季大会に、下級生三人と共に僅か総勢四人で、「鉄輪」を謡つた時程、周章狼狽した事はない。定刻迄、待てど暮せど頼みとする地謡の面々は現われず、致し方なくシテ・ワキ・ワキツレの三役と地頭の私のみで出演。三十人を超える関学のオール・スター・キャストの後丈に、如何に少数精鋭を誇るとは言え、寂しさを極め、各々独吟に等しい為緊張し、謡い終つた後、四人共全然脚のしびれを感じず、唯流れ来る汗を拭い乍ら、互に苦笑を交す乍りであつた。

七月の初めより二ヶ月間続く夏休みは、正に学生に与えられた特権であり、サラリーマンに成つた今から思えば、垂涎の的であるが、この夏休みを利用して、避暑を兼ねた合宿練習と洒落れこみ、七月二十日過ぎの土用のさ中に、総勢十一人南海電車高野線に乗り込み、高野山は遍照尊院へと向つた。院主は、仲々物分りの良い方で、早速新築成つたばかりの離れ座敷の二階大広間を明け渡してくれ、「私も少し謡の素養があるので、一度是非皆様の謡を拝聴させて頂きましょう」とか何とか、お世辞も言つてはくれたが、その実、寺院経営に忙しく、終に一度も我々の稽古場には姿をみせなかつた。觀光高野山は夏がかけ入れ時であつて、近頃の坊主というのは、……………閑話休題。

人間の声帯は、甚だ鋭敏にして且つ繊細である事を、身をもって、この時味つた。たかだか高度が、八一九百米程上つた為、少々温度と湿度の具合が変つたという丈であらうに、皆打ち揃つて喉を暖らし、翌日情ない声を絞り出す寸末。私自身その最たるもので、

これには全く弱り果てた。お蔭で、「ヴィックス」、「ボン・ヴェオックス」等々声帯用妙薬の名を教えられ、未だに忘れかねている。然し、三日もする中に声も復調し、先輩牧氏の来訪に力を得て、最後の夜の宴には、殊の外、美声を発し、皆々各家伝・一子相伝の秘曲、珍曲を披露してくれるに至った。数日間起床を共にした丈で、之程までに気分合うものかと、その時驚き入ったのであるが、合宿の収獲は、謡の基本を語り、技術を磨く事もさりながら、何と云っても「同じ釜の中の飯を食べた」という親しみから来る気持の一致であり、謡う一同の団結であった。

たのである。審査員の評では、「二位の関学は技術的に抜群で問題ないが、二位の甲南大と三位の神戸大は紙一重の差であるが、シテ謡の優れた甲南大を敢えて二位に推した」とあったが、審査員の総合点では、甲南大をやや上廻っていたのであった。これは傑出した謡い手は居なかったが、学生らしく伸び伸びして居り、よくまとまった謡いであったが、節廻し等技術的にやや粗雑な箇所があった為、減点が大きかったとの事であった。小ブシを正確に謡う等々の所謂職人芸を高く評価し、我々の学生らしいチーム・ワークを何故無視するのか、と一同憤った事であった。

卒業この方、社会に出て、謡っても、不幸乍ら、一度も学生時代の様な心の底から、ピッタリ一致した地謡を謡えた経験が無い。誠に悲しい事である。

「そもそも謡コンクールなるものの存在価値があるか否か、甚だ疑問である」と、かねがね宇治先生は非常にこのコンクールに対して批判的で居られ、能芸術の本質よりみて、枝葉末節的な点で比較するのは、およそ無謀というものであり、ひいては能楽に対する侮蔑であると激怒された事を記憶している。

この合宿の甲斐あつてか、各学共レベルが高いと伝えられる年であったにも拘らず、その年の秋に催された学連主催の連吟コンクールに、「草子洗小町」のロンギを引っさげて出演し、堂々三位の栄誉を獲得した。やっと就職の決つたばかりの五回生と、試験ボケのした六回生を率いて、集会所の稽古丈では物足りず、楠木町の稽古場から、和田岬の新三菱重工の稽古場に迄、宇治先生の蔭を慕つて、ゾロゾロと押しかけ、種々御教示を仰いだ。張り切つて謡えば、「それでは三番目の謡になっていません」と言はれ、抑えて謡えば、「口先丈でつぶやいている丈で、謡になつていない」と叱られ、夫々の稽古場では、飛入りの身でありながら、稽古場の常連をソツチのけで、先生自身、親身になつて一時間半以上も教えて戴い

然し乍ら、出演して、まがりなりにも入賞した者にとつては、悪い気持もせず、上位三校は、ラジオ神戸（今のラジオ関西）より、「学生の時間」に放送すると言はれば、木枯の吹く中を、須磨のラジオ神戸迄わざわざ録音に出かけたが、スタジオは防音装置の故か、声が吸いとられ、謡独特の反響音が無く、全く心もとなない限りで、謡っている本人ですら、自分の声帯を疑いたくなる程、ガラス鉢の中の金魚さながらの想いであつた。

別謡会」が到来し、追い出される身と成れば、恒例の卒業生、在校生混成による「蟬丸」のシテを、無事謡い終え、続く追い出しコンパでは、あの汚い集会所の畳に何時迄も名残りを惜んだのであるが、宴の果てた後、ホロ酔い加減の一同、あの坂道を下り乍ら、「蟬丸」の一節「花の都を立ち出でて」を謡つた想い出は今も尚、懐しさに余りあるものがある。華麗に節づけられた謡声が、夜のしじまを破つて、遠く六甲の山々にこだましたあの瞬間が、未だに忘れられない。空を仰げば満天の星空、眼前には今も交らぬ百万弗の夜景を誇る神戸市街が音もなく輝く早春の宵であつた。

(日商勤務)



「日記」は語る

三十四年卒 上竹原康宏

いつの頃からか、私には「日記を書く」という習慣がついた。数えてみると、もうかれこれ八年になる。日記を並べてみると、右の方から順に黄色く年代の古さがしみついている。日記を書くについて「毎日欠かさないこと」——これを信条とした。学生の頃、富士山に登つた時も、リュックにかつきこんで重たい思いをし、故郷に帰る時も下着と一緒にバッグに忍びこました。三等寝台の豆ランプを頼りに旅愁を綴り、ある時は船のデッキの上で、麗わしい乙女の面影を慕いながらペンを走らせ、また「人生とは何ぞや」と一人で力んで書きなぐつてある。

いずれにしても、日記というものは、人生の記録として、赤裸々な自分の姿をいつでも浮彫りにして現在に再現してくれる。

先日、春の日ざしを思わせる暖かい日曜日。思ひ出したように大学時代の日記をバラバラめくつてみた。その中にこんなことが書いてあつた。「俺の大学時代に残したもの——それは、卒論と謡」とただそれだけだ——。

なるほど、学窓を去つて三年たった今、ゆっくり振り返つてみても、お恥しいながら、煎じつめればただそれだけしか残っていないような気もする。もつとも、「卒論」といつてもどちらからといえ、卒業しなければならぬから書いたものであるし、また「謡」

といつても、人様の前で披露できるようなものでもない。ただ言えることは、私の大学生活の大半が謡に明け、謡に暮れたと言うことは、日記を見ても明らかである。

五月十四日

ジュニアの姫路時代に謡曲部の幹事をやっていたが、六甲台に来て初めて「風韻会」という謡の会があることを知った。恐る恐る顔を出してみる。先輩の方々が七、八人何やら大声をハリ上げて謡っている。あとで聞いたら「草子洗小町」と教えてくれた。

入部の希望を述べると、いきなり部費を取られた。これから昼食時間に練習するから集会所に出てこいと宣告されていささかおののく。

六月六日

毎日集会所でやっている謡だけではあきたらなくなった。聞けば、師範の宇治先生が楠木町で個人指導をして下さること。ちょうど俺の家庭教師のアルバイト先が、同じ方角の和田岬だ。そのついでに……と今日は意を決して行ってみる。「小督」を小脇にかかえて部屋に入るとまず女性の顔が先に目に映る。先生と呼ばれて前へ進み出た。先生のあとについて謡うのだが、まわりが気になつて声がかすれて仕方がない。「丹田に力を入れてやり直しなさい」と注意される頃には全身に汗がにじみ出る。急に手に持っている扇子で扇ぎたくなつた程だ。女性が気になるようでは俺も修養がたらない。先輩に月謝は五〇〇円と聞いて安心した。

六月二十九日

月並いが集会所である。俺は「嵐山」を独吟、集まったのは十三人だった。神戸葉大から女性が一人参加した。ある先輩と何か関係がありそうで俺はクサイとにらんだ。

今日の会合で、謡曲部の幹事を押しつけられた。先輩は早や就職とかで現役ながら部活動ではOBの形だ。西野先輩から「わからんことは俺達がやってやるから心配せんかてエエ」と慰めてくれた。俺がとつさに心配したのはまず「ゼニ」のことだった。しかし引受けたからには、文化サークルとして楽しいものにしていきたいと思う。学生時代にこんなことをやるのも別の意味で勉強になろう。

十一月十一日

謡曲部の練習が毎日続く。今度のコンクールに「葛城」を出すことになつている。宇治先生の前で一緒に謡うが駄目。「諸君の謡は活字を並べたようだ。気合いが入っていないし感情もない」と批判された。

先生が帰ったあと堤先輩が「葛城は雪の中が舞台だ。地謡も袖をつぼめるぐらいに寒い感情を出さなければ……と一言に部屋の窓を開ける。十一月の寒風が薄い学生服をおして身に染み渡る真剣そのものだ。後日の笑い草にもなろうが……。

十一月三十日

学生コンクールが今日湊川神社で開かれる。定刻三時開始、一瞬皆の顔に緊張感が走る。神大の出番は九番目。それまでに立ち方、坐り方皆をそわしてやつている。俺は一番先に出なければならぬいし、舞台のどの辺りに坐つたらよいか慌てた。出番間際にトイレ

「謡い」雑感

三十五年卒 有田直行

に行く。期せずして五、六人行っていた。顔を見合わせて苦笑いする。舞台に出るからは一問ぐらい先を見つめてクソ度胸を出して謡った。審査員をチラッと見たのを覚えている。

結果発表——関学一位、神大二位、神大院大三位——感激の一瞬だった。予想は自分達がつけてもまったく予断を許さなかっただけに発表と同時に皆と握手して喜こんだ。

——コンクールについてのメモ——

審査員の批評から……。本学が注意されたことは、謡の解釈——つまり「葛城」であれば、もつと雪中の静かなそして寒さを思わせる感情をこめて謡うこと（この点は宇治先生のコンクール前の批評と偶然一致）ということだった。

一般他校に対する批評は、①謡が揃うこと——③個人プレーを避ける、④十分に謡を解釈すること、④発音をはっきりすること——、以上であった。

とにかく今日は感激の一日。三商大合同交歓会の感激と共に、「謡」を通じて有意義な学生生活を送れたと思う。やはり「謡」をやつてよかったとしみじみ思い、今後も一層研鑽を重ねていきたいと思つた。

(日興証券大阪支社勤務)



六甲の学舎を離れて、もうかれこれ二年近くにもなります。学生集会所で部員全員が「腹に力を入れて、真剣に、宇治先生の教えをうけていた姿が生きて目に浮ぶのでありますが……。こうしてペンをとって学生時代をふりかえってみると、月日のたつのは早いものだというのを身にしみて感じないわけにはゆきません。

会社へ入つて一番強く感じることは、季節感といったものがなくなることです。学生時代には、二月と九月には試験があつて大きな区切りになっておりますし、たとえば風韻会の一年間だけをとりあげても、三商大の謡曲会、創立記念祭、夏の合宿、秋のコンクール、そして卒業生の歓送会など、季節感をともなつた盛り上りの機会に恵まれております。会社員生活はその意味では非常に単調です。とくに冷暖房の完備したビルにいますと、うっかりすると春も夏もないということになります。そこで、非常に無為に人生を送っているような気持ちになりかねないのであります。

私どもの会社では入社後一年間は営業所など第一線現場に配属されて、現場の空気を吸ってくるしくみになっております。その期間は、私どもは会社の規程類を勉強したり、仕事の流れをみたり、また実際に検針集金をしたり、あるいは、スクーターのうしろに乗せてもらつて電気故障を直しにも行きます。

私自身は、西宮市にある営業所で一年間過したわけですが、自分で責任をもった仕事をさせてもらえないという不満を除けば、非常に快適な一年間でした。この従業員二百人ばかりの営業所には、十人足らずの謡曲のグループがあり、観世流でもありましたので、私も早速その仲間に入れてもらい、毎週水曜日の退社後、会議室で練習に加わりました。練習といっても、畳敷の部屋がなく、椅子に腰かけた格好では腹に力を入れることも思うにまかせず、(こう書けば練習風景も大体想像がつくと思いますが)、学生集会所の畳をよく思い出したものです。

むしろ印象に残っているのは、年に三回ばかり、阪神打出駅に近い「打出クラブ」という社員クラブで開いたささやかな発表会で、土曜の午後の当日には、仕事を早いにきりあげるとみな張りきって集ってました。メンバーは、男子五名、女子三名といったところが常連で、営業所の庶務関係をやっているM氏と、集金のK氏とをリーダー格として、あとは私をも含めてみなどんぐりの背くらべといったところでした。会はたいがい二時すぎから始まりましたが、各人が一曲づつ好きな曲のシテをやり、残りのものがそれに合せてゆくことにしていました。私はだいたい無精者ですから、いつも学生時代から比較的手なれた曲を希望することにしていました。「小督」や「安達原」などであったと記憶しています。面白かったのは、当日の模様をテープにとっておいて、二、三日たった昼休みなどに会議室で再生しては大笑いしたことでした。

当日弱ったことは、なにぶん人数が少ないので地方が足りず、しかたなしに三曲ばかり連続してやると、学生時代からの脚の弱さを

暴露してしまったことです。とくに念入りに気分を出してやられどもすると、祝言がすんで、懇親会の膳に向う頃にやっと心地がつくといった有様でした。コンクールのような短期決戦の場合はよいのですが、体質のせいなのか、要領が悪いのか、少し長い曲目になるともう私の脚は駄目になるようです。

また同じ頃、営業所で発行している社内報に「趣味について」という題で、趣味をもつことが人生をどれだけ豊かなものにするかを、マッチのレットル集めをやっている、風韻会の友人のN君などをひきあいに書いて書いたあと、現代人の趣味の多くが、各種サービスマシナによっていわば与えられた、受身のものとなっている。その点、謡曲は、自分自身で創りだし、自分独自の世界にひたれる、数少ない趣味の一つであり、自分は一生この趣味をもちつづけたいと思う、といった小文を載せ、小唄に打ちこんでいる某課長から自分も君の意見に大いに同感だと肩を叩かれたりもしました。

ところが、二年目に本店に移ってからは、謡いともさっぱり縁がきた格好で、ときたま前記営業所からささいの電話がかかっても、仕事の都合で出られなかったりで、今ではけいこ本もめつたにひろげなくなってしまうのは、残念でもあり、さびしくもあります。とくに、風韻会の催しにもちよい欠席を余儀なくされて

いることは、まことに申訳ない次第であります。私とて風韻会のはしくれである以上、仕事で一人立ちができるようになれば、「謡い」の方も新規まき直しをはかる気概は十分持っているのであります。今後とも神戸大学風韻会がますます発展してゆくことを祈りつつペンをおきます。(関西電力本社勤務)

「誌上研究室」

能楽の現代に課せられた一問題点

——能楽と大衆との関係について——

はじめに

能楽が現在直面している問題、即ち「能楽と大衆との関係」について、能楽と演劇との差及び小説等の現代に示す位置と能楽の古きとの対比を通じて、ここに私の一つの考え方を提示して、皆様方といっしょに、今後考えて行けたらと思います。

私はよく友達から、「謡曲についてなぜ、新しい事を求めないのか、」と質問を受ける。その時には決して私は次のように答えて来た。「謡曲、もつと全体的にみて能楽と言うものは古い日本特有の芸術であって、それを後世に伝えうるだけの要素を持っているのであるから、表面的に観た場合、一般的には絵画等のように、常に新しいものを求めなくとも、それで充分ではないか、」と又「けれどもむろん、その演技の内容は演能者のその曲目に対する工夫がなされるが、それとても工夫がこらされたからと言って、能楽の根底をくつがえすほど強烈なものではない」と、……………。

J 10 永田守男

ここで皆様に考えて頂きたいことは、日本人の国民性である。西洋人は彼等の感情を露骨に表わすと言われるが、日本人はどうか、最近は大部アメリカイズムの浸透により、変わったと言っても、少くとも日本人は西洋人のようには、感情を露骨に表わすことはないであろう。いやむしろ反対にじつと腹に納めておく方が多いと言えないのではないだろうか。だからと言って決して感じ方が鈍いと言うのでもなく、情が浅いと言うのでもなく、所謂千万無量の思いを胸にためていると言っているのであり、真の情愛からいえば誇張的な西洋人よりも、寧ろ一層深いと言える。このような日本人特有の感情と言ったものが、能楽にも表われていると言えるのであって、即ち表面は動かず心持が動くとも言えましょうか、表面の形よりも内面に隠された心持を感じ取るといった、日本人独特の腹芸、これが特に能楽にはあると思います。ですから私は能楽を理解して精進されている人々は論外としても、能楽、特に謡のような生粋の日本の趣味は、それを好むと好まざるにかかわらず一通りはその芸術精神を

知っていてもよいのではないかとさえ考えます。

二

所で、例えば創作芸術として、今日よく言われるベスト・セラールを見てみるに、読者諸氏に対する作家の文学的技巧による迎合（へつらい）がそこにあると言えないだろうか、このような迎合は、コトナカレ主義へと走り、やがては大衆から見離される結果となるのであるが、それはともかく、ベスト・セラールと言われる小説は読者諸氏の現実の生活にそれが受け入れられた場合か、あるいは反対に現実の生活には受け入れられない要素を含みながら、極めて巧に、それを使って大衆を引つけて、大衆の夢を紙上に書き表わすことによって、即ちオトギ話的なものにするることによって、大衆に迎合する時、そこにベスト・セラールとして登場して来るものなのであろうと思う。

右のことは、原則として、絵画にも音楽にも言えることであらうと思う。ただそれ等の中でも読者や、観客等への迎合（へつらい）がなく、芸術の真髄にふれ得たもののみが、古典となり名画、名曲として伝統芸術の一頁を飾って行くのであると考えられる。

しかしして、我国においては能楽もその伝統芸術の一つであって、この事実を誰も否定することは出来ないであらう。しかも世界の芸術史上からいっても、能楽はすて難いものであり、すてざることに出来ない重要な地位をしめしているとさえ言わざるをえないのです。

三

むしろ能楽が大衆に迎合する（へつらう）ような芸術になつてはならないのであつて、そのようなものになつたら、当座はと

もかく、日本古来の伝統芸術として能楽はすでに姿を消すことにならう。

今、私は能楽が大衆に対する迎合を持つべきではないと言つたが、しかしながら能楽が今日に至るまでの間には、義満の時代に抒情的な風体を基盤とした猿楽を取り入れて、写実的な表現と舞歌の調和された能楽を完成した。観阿弥と世阿弥以来、応仁の乱による社会的不安の時代に遭遇し、足利氏の権政が動揺し、世は戦乱の時代と化した。かかる時代をすこし、以後信長、秀吉、家康と歴代の為政者の庇護を受けて発展し続けて来た。このために武家階級に対する迎合は多分にかがうことが出来るのである。即ち為政者の好みに合うものが多く演能されたり、衣裳が美しく、はでになつたりしたのがその例である。しかし、このために大衆に対する迎合の機会があたえられなかつたとも言える。けれども私のいう迎合ということとは能楽の根底からの迎合を意味するのであり、即ちベスト・セラールのように小説自体の根本の迎合のことを言うのであつて、衣裳等が、はでになつたからといって能楽の真髄までも変わったとは言えないと思う。いやかかることはなかつたときさえ言える。人によっては能楽が、幕府等の庇護をうけていたために大衆芸術としての能楽は明治時代に入つてからなのであるという。たしかにそうかも知れない。（江戸時代には、観世流などは、かなり町風のなものでして、したしまれたのであつたけれども……）

実際、能楽は大衆芸術として発達したのではなく、むしろ武家階級の芸術ともいえる。しかし能楽が出来て以来の我国の歴史をひもとく時、上述の時代はいづれも封建時代であり、権政者によつて

代表せられ、まったく一般大衆は無視された形であつた。しかるに江戸時代の大衆文化の華である。元禄時代といえども、徳川幕府の権政を切り離しては考えられない。だから我国の歴史は文化の面においても自然、支配階級のものと同され、それにしぼられて来たのである。けれども江戸時代に入ると、これにあきたらず、文芸史上に登場して来たのが歌舞伎であり、美人画であり又、滑稽本を初めとする一連の小説類であつた。確かにこれらの物は一時代を築いては来たが歌舞伎をのぞいては、今日文芸史上にその一頁をかざるにすぎない。もつとも舞台芸術と言われる能楽や歌舞伎と小説や絵画とは根源的に異つたものであるから、それ等のものと比較すること自体がすでにあやまつているかもしれない、しかしその根底に流れるもの、即ち国民性や民族精神といったものには共通点があると言えないであらうか。

一方歌舞伎にしろ、演劇にしろ、それらの舞台芸術はその源流は猿楽、田楽の流れをくむ能楽にみられると言われています。けれども能楽は室町時代の創成期の激烈たる現代演劇のそれとしてではなく貴族的な比重があり極めて様式的象徴的にすぎない舞台芸術ではあるが、今日のように古典化し、骨董品的美術品となつたのは実は、江戸時代になってからであつた。それまでの時代にあつては社会の内で生き続けて来た立派な民族芸術であつたと言える。

四

ではなぜ今日能楽が一般大衆、特に若い世代から離れてしまったのだらうか、それは単に能楽が古典化し骨董品化してしまつたからであらうか、まず第一に考えられる事は、現代の社会において、

「芸術」はもはや、「感情だけを伝える象徴とされる」（芸術の定義については諸説が多く存するが）という様なこととは解されていらないようである。

又、明瞭な文章をもつて聞かせることの方が一般的には受けるのである。だから何等の知識が無くともその場ですぐに、とけ込めるものの方がより好まれるのであろう。

第二にマスコミによる人間の知識欲の減退がそれである。思うに表面的には週聞誌、新聞、雑誌、ラジオ、テレビ、映画等、大衆の目又は耳を通して広い知識をあたえているように見えるが、実はそれが知識と言えるものであるかどうか、私には疑問に感ぜざるを得ない。真に知識と言えるものを「物事を理解すること」と解するならば、まさに今日のマスコミのはたす役割は知識欲を大衆から奪いつつあると思えてならない。即ち、大衆は「知る」ことしかせず「理解する」ことはしないからである。いわんや「知識」などからは縁遠い話である。そのために大衆は理解しやすいものを好み、理解し難きものを敬遠しようとするのである。

第三に映画にしろ、演劇にしろ常に新奇なものを追い、舞台あるいは画面の変転の激しい装置、それと常に変わる大衆の視野、それにうまくなるためには、どうしても伝統的芸術形態をすてざるを得なくなる。歌舞伎にしても今日上演される出し物の内ほとんどは現代の劇風に近いもの（セリフ入りの時代劇）で古来からの伝統的な出し物はしだいに少なくなつていく。けれど能楽にはそれが無い。新作能にしても、新しい演出がなされただけで、謡のフシや囃子の調子がまったく従来の能楽からは、かけ離れてはいないのである。

このように能楽が現代社会において受け入れられない要素はいくらでもあり、結局、古典化し骨董品化してしまつているとしか言えないくなるであろう。

五

このように大衆に受け入れられない能楽を大衆一般特に若い世代の人々に受け入れられようとする努力は、現在の社会において不可能に近いものと思えない。もし可能なものにしてしまうとすれば大衆への迎合（能楽からのへつらい）という伝統芸術、特に古典芸術の良さをすてさらなくてはならないであろう。即ち「芸術」を感情だけを伝える象徴としてではなく、かかる意味をすてきり、明瞭な文章によつて聞かせ、理解しやすいようなものにならなくてはならなくなるのであり、そのようになった時、能楽はすでに芸術ではなく、単なるショーにすぎなくなるであろう。

思うに、伝統的芸術、特に古典的芸術というものは芸術、それ自体の側から大衆へ呼びかけて、おしつけるものであつてはならず、たとえそのような行動に出たとしても、それは歪んだものとしてしか大衆には受け入れられない場合が多々ある。むしろ古典的なものは大衆の側から入り込むべきものであり、かかる場合においてこそ、真の古典的芸術の良さが理解されるものと考えられる。一例を上げれば、我国の古典として、又世界の古典として代表的な「源氏物語」を古文を通じて理解する場合と、現代文に書き下されたものを読んだ場合——現代文に書き下されたものは、いわゆる古典側からの大衆へのおしつけであるが——とどちらが正しく「源氏物語」を理解しうるであろうか、むしろ前者の場合の方が可能性が大である。

れども）それを失いたくないからです。

我々の若い世代は伝統と言うことを好まない、しかるに当然伝統というものに縛られたくない、けれどもあえて伝統というものに縛られて、能楽に魅せられるのも、結局は「能楽の良さ」に引きつけられるからなのであると思う。私は若いけれども、もつともつと多くの若い世代の人々に「能楽の良さ」と言うものを理解していただきたいと思う。このための努力は私達が若い世代に生きる者に対して行つべきものであるのだが……。

しかし、それにも限度がある。宣伝や広告だけでは如何とも、なし難いもののように思う。幸いなことに最近、テレビや映画の画面によく謡曲が流れて来る。いわゆるリバイバルブームとでも言おうか、そんな細々なものでもよいから、もつと一般にしたしめる機会がほしいと思う。とにかく、一度でよいから、謡曲をまだやっていない若い人々にやらせてみたいものである。

現在人の精神力

E 10 左 鴻 秋 義

テクテクと歩いてきたのがカゴになり人力車になり自動車になる。使者をやつて思いを告げていたのが電話で簡単に用事をすませるようになる。技術が高度に発達し政治経済が近代的になる。教育

ると言えよう。けれども、ただ古典芸術はじつとしていけば大衆の方からそれ等の良さを自分達が見出し、溶け込んで来ると言う考え方は少々甘すぎると思う。

「源氏物語」を理解する場合でも、それを研究している人々から教えられ、そして自分自身の能力に応じて理解すると同様に、古典芸術の場合にも、それを研究している人々から教えられ、そしてわれわれ自身が自己の能力の範囲内で、出来るだけ理解し、自己の創造力においても出来るだけ正しい道を選び、大衆が理解出来るようにもつて行つてこそ、初めてそこに大衆が入り込んで来るのではないかと考えられます。しかしこれは大衆への迎合（へつらい）では決してないので、何となれば基体たる古典的芸術は何ら変貌してはいないからです。ただ、今までは一般大衆が能楽について、理解しようとする動機をあたえる機会があまりにも少なかったことが、この問題に対する最大の問題点であつたと言えましょう。

むすび

結局、能楽は現代流の風潮におしながされ、一般大衆に迎合するようになるべきではなく伝統芸術として、その良さを守りつづけるべきであると思う。たとえ骨董品化してしまつた美術品であると言われようとも、それはそれとして、ともかく伝統芸術としての格調を維持すべきであると思う。この事は決して新作能を否定することではない。新作能も結構である。しかし新作能を作る場合でも能楽の本래の姿、即ち「能楽の良さ」を破壊すべきではないのである。「能楽の良さ」（それはスルメのようなものと考えられるけ

も文化も合理的になる。あらゆる生活上の現象が進歩発展しているかの如く見える。しかるにその進歩に反比例してますます退化して卑小になつてゆくのは人間の心、精神である。

元禄時代の禪人祖暁が或る地蔵尊の開眼式に臨んだ。そのとき彼は地蔵尊の前につかつかと歩み寄り、言つたことがふるつてゐる。わかりやすく現代語に意識すれば「お前はもともと石にすぎないではないか。しかるに我はすでに久遠の昔からの仏である。えらそうにつつたつていないで、おじぎをしたらどうだ」と。いあわせた連中がびつくりしてしまつた。有難い地蔵尊に向かつて偉い禪僧の祖暁様ともあろうかたがなんということをしなさるか。しかしここまではどうでもよいのだ。この次ぎが重要だ。祖暁が地蔵尊をこのように叱りつけると、あら不思議や、その石の地蔵が命令にしたがつて、がくんと上体をかがめたのである。

この地蔵尊は今でもおじぎをしたまま甲斐国都留郡法泉庵に立っている。時は元禄十二年四月二十四日、そのとき開眼式に参列した人々が異議なく語り伝えたということである。疑うことの出来ない事実である。

この話をする、科学教育に幻惑された現代人は異口同音にいうだろう。「そんなバカなことがあるものか。たとえその曲つた地蔵が現存しているにしても、それははじめからそのように作つたにすぎない。のちの人がその曲つた地蔵を見てこんな伝説を拵えたのであろう」と。しかしこの言い伝えを否定する科学的根拠は何一つないのである。現代人がこのような事実を自撃することが出来ず、また合理的に科学的に説明出来ないからといって、過去にも無かつた

とはいえないのである。ここに現代人の精神力の弱体化がよくあらわれている。精神力で石一つ曲げることが出来ないだけでなく、このようなことを想像することも出来ないのである。従ってこの事実を認めることも出来ないほどあわれな存在になってしまっている。柿本人麿の「妹がかど見む、なびけこの山」という気持も現代人にはほとんど理解出来ないであろう。

能には現代人の思惟の領域を越えるような話が数多く出て来る。鬼神、物怪、怨霊等もその例である。鬼神を行者の祈り（念力、精神力）で退散せしめる。この場面を現代の人々はどんな気持で観ているのだろうか。「当時は科学が発達していなかったのであんなことをしていたのだろうか。物怪・怨霊なども迷信深い彼らの幻覚にすぎない」などと考えているのではなからうか。もしこんな考え方は能を半分も理解していないことになる。能作者の気持をも理解出来ないであろう。

現代における能のあり方がいろいろ論ぜられているが「能の精神が重要なのであって、形式には多少の変化があってもよいし、またなければならぬ」という意味の意見をよくよく。これはまさに能芸術の極致に達した名人のはく至言のようである。しかし至言であるだけにそうやすやすとだれでも口にしてよいものではない。生半可に口すれば能の死滅をもたらす危険な考え方である。形は精神のあらわれであって、精神をうけつければ必然的に形もうけつがれるのである。

禪に嫡嫡相承ということばがある。師の持つているところのもの

んだんとわかってきました。これからも謡や能に親しみ、「謡の心」ともいべきものを理解するよう努めたいと思つています。姫路分校の一年半は、都留好子先生に教えて頂きました。女の謡の先生というのはちよつと珍らしいのではないかと思つてます。先生の美しい謡にはいつも感心させられました。私達が分校にいた頃は六甲台との交流は殆んどなく、一時は「紅葉会」などと称していましたが、今では風韻会の中に入っています。姫路の頃は練習もあまり活発でなかったのですが、それでも、姫路から初めて、開学記念祭に参加したり、都留先生の好謡会の会に参加するなど各方面に活躍(?)し、なつかしい思い出になっています。そしてだんだんと謡をやりはじめてよかつたと思つていきました。

六甲台に来てから、練習を毎日やるようになりやつと声ができるようになってきました。それに関西学生連盟の大会とか、各校との交歓会など舞台に出る機会も多くなり、非常に忙しくなりました。又宇治先生の会にも参加させて頂いたりして、大いに修行もできるよくなりました。

二

謡をやつておられる皆さまにも、いろいろと思ひ出の曲があると思ひますが、私にも思ひ出深い曲の一つに「紅葉狩」があります。姫路分校の時、はじめて六甲台の開学記念祭に参加したときの曲がこの「紅葉狩」でした。節にも変化があり、内容もわかりやすく興味もあり私達には手頃な曲といえるでしょう。四年生になって、仕舞をやるようになりましたが、最初の仕舞が「紅葉狩」でした。不器用な私はなかなかうまく行かず、宇治先生に一通り教えて頂いた

をそのままそっくり弟子が承継し、それをまた自分の弟子にそっくりそのまま渡してゆくことである。その受渡しには寸分の多寡もあってはならない。伝統芸術としての能を保存してゆくにもこの嫡嫡相承がなされるべきであると思つて。こういうとまた、気のぬけたサイダーのような現代人から非難されるかもしれない。「そんなことをしては能の発展はありえない。先代の残したところに、更に我々が独創的なものを追加し、不備なところを改善していつてこそ能の生きる道があるのである。何も附加しなければ能は衰退して遺物化してしまう」と。観阿弥・世阿弥がこの言を耳にするとさぞかし淋しき思ふことであろう。このような妄言居士は到底能の精髓を把握することは出来ないだろう。もし観世父子の偉大さを真に理解したならば彼が穴があつたら入りたくなるであろう。初心者にかぎらず能（謡曲）の道に入ったものは、つねに形を粗末にすべきではないと思つて。軽々に形を変化させてはそれは能の断絶以外のなにもものでもない。

謡曲ショート・ショート

E 10 中島圭吾

謡をはじめてから約四年、一向に上達しませんが謡の楽しみはだ

後も形付の本を頼りによく練習しました。そして、一橋大学で行われた三大学大会に出場し、又開学記念祭の仕舞にもこれをやりました。仕舞はこの「紅葉狩」の外に「俊成忠度」や「竜田」等をやりましたが、私には仕舞はどうやら苦手ということになりそうです。それでも、今後舞台で仕舞をやるというような機会が殆んどないと思われまのでよい思い出になることでしょう。下手な仕舞を舞台でやるのも学生の故です。

このように「紅葉狩」は私にとつて忘れられない曲ですが、これを教訓にして、美人の酌に思わず盃を重ねうつつりとしていて、気がつくともポナナスが空っぽというようにならないようにしたいと思つてます。この他に「土蜘蛛」を分校の時によく練習しました。又「千手」、「安達原」、「熊野」、「東北」等がよく練習もし、又好きな曲です。

三

私が能を観賞するようになったのは六甲台に来てからです。神戸国際会館で「鉢木」を観たのが最初でした。はじめのうちはよく理解できませんでしたが、毎月観ているうちに面白くなってきました。そして、「熊野」を観たときは本当に感激しました。名曲と云われるだけあつてさすがに素晴らしいものでした。熊野は母が病氣のため暇を乞うが許されず、主人の供をして花見の宴に行くことになり。紅色の花見車に乗った熊野は春の洛中の美しい景色を眺めても心は病母を想つて沈む。やがて清水について桜花の下の酒宴に待り、所望によつて、舞を舞うのです。舞台には桜の木ならぬ松の木があるのですが、私には桜花落る酒宴の席で舞う熊野の哀しい心が

ひしひしと伝わってくるのが感じられるようでした。この「熊野」の外に、「屋島」の豪放な舞も印象深いものがあります。又衣裳も華麗でした。特に他の曲では間狂言は大いつまらないものとされて、間狂言の時に席を立つのが、通であるとか云われますが、この「屋島」の間狂言は迫力があり、面白いものですので、席をはずすなどとはもつての外だと思えます。「邯鄲」の能の時は袴能という珍らしい形で行われ、又違った趣きがありました。それから宇治先生の能も沢山観る機会がありました。その中でも私には、「班女」が印象に残っています。

四

二月の下旬に文楽の吉田文五郎翁が亡くなられて、それと同時に、古典芸術としての文楽の存続が危ぶまれるというような問題も表面化してきたようです。私も一度氏の高弟桐竹紋十郎をみたことがあります。さすがに見事なものでした。ところで能楽界においても能楽を広く普及せしめるといふ課題をいつも背負っていると思えます。私達学生の間において、能を観ようという人が少ないのは残念なことだと思います。又世間でも謡をやる人はかなり多いようですが、何か謡を独立したものと考えている面もあるのではないかと思えます。謡はあくまで能の一部であり、能をみずして謡はわからないということをおもひも念頭においておきたいのです。興行形式の問題とか、映画その他の娯楽が盛んであるとか、能の前途も楽観視できないと思われませんが、能を愛好する人々にとっても看過できないといえましょう。

五

合宿のこととか、交歓会のこととか、風韻会のことについていろいろと思ひ出が多いのですが、長くなるのは題名に反しますのでこれでおきます。私もいよいよ卒業ですが、御指導をうけました宇治先生や諸先生方、先輩の皆さんに感謝致しますと共に、現役諸君の一層の活躍を祈らずにはおられません。私も及ばずながら、できるだけ協力したいと思っています。

(おわり)

お能と金閣寺

E 11 形部 靖

私はいつも京都へ行く度に金閣寺を訪れる。あとの衣笠山の緑に映える、金色のお堂の持つ華やかな美しさにいつもひかれるからである。私の父などは、今の金閣寺を見て「昔の面影とその良さは無い」というのであるが、私はその昔の面影をしのぶにもそれを知らない。私の知っているのは、あの「べに金」の金閣であり、金色さん然たる金閣である。それでも私は、あの堂の前に立つと不思議と何ともい得ぬ澁い気持になるのである。そして片方で常にお能の前奏の笛と鼓の音を虚耳に聞く思ひがする。この連想が正しいものであるかどうか、それは私には分らない。併し金閣と能の囃子の

連想は私にとっては切るに切れない関係を持つ、自分は能楽に関して殊に文献を読みその正否を確めたことは残念乍らない。併し自分のこの連想が間違っているものではないかと思ふ。

私はいつか国語の時間に幽玄の内容が、室町時代と江戸時代では随分変わって来たと言ふことを聞いた様な気がするのですが、あの金閣の華麗さの中に室町時代の幽玄が、具現化されているのでなからうか、緑に映える金色の華麗さはとうてい今、世上で一般に考えられている様な幽玄の概念とは相容れない。

私は、いつも能を見る度に何ともい得ぬ華かきを感じる。抑えでも抑えきれずにあふれ出る様な華かきか、この芸能の中にある様な気がしてならない。あの義満の時代、困難な祖父以来の創業を完成し切って、全国制覇の功に酔った武將義満の愛好した能の姿なるものが、とても現在世上に考えられている様な、暗い感じのものであったとは思われないのである。

その創業完成の功に酔い、一方に於いて金閣を建て、他方に於いて能楽を愛好した。武將義満の心とその豪華華麗な趣味は、以前の古ぼけた金閣より反って今の金閣が、よく表すのではなからうか、ひいては、当時こよなく彼の愛した世阿弥の大成した能楽にもこのことが当てはまり、この能を私の様に理解し感じることが、決してあやまりでは無いのではなからうか、この様に考えると、私が高校時代習った、花伝書の一節に於いて強調されていた「幽玄」の、その言葉の本体は案外に非常に「華かな」ものである様に思われて来るのである。

この様な理解が能楽の本質を適格に理解していると言えるかどうか

学連雑感

E 11 久下 昌男

学連(詳しくは関西学生能楽連盟)の委員を仰付かって一年にわたる。この間何をしたら云うではなく誠に慚愧の念に耐えぬ次第である。松岡、山口両先輩のお伴をして昨年の学連秋季大会の反省会に出席したのが最初であったが、その際、松岡さんがクラブ活動の在り方と云うか、謡曲部の在り方をどうもいうか、兎も角、その様なことについて議論されていたのを憶えている。

* * * * *

さて、最近の学連委員会で議題になった二、三の事柄について、ここで考えてみたいと思う。

その一は、秋季大会についてである。秋季大会には所謂コンクー

ルがあるが、僕の知る限りでは秋季大会の大手の意義をこのコンクールが占めているということである。勿論、各大学がコンクールに力を入れ、これが主たる内容となるのは、この制度が存する以上呑めまい。併しながら最近の傾向を眺めると、コンクールの為の秋季大会の観が強過ぎるのではないかと思われる。昨年にしてもコンクールの発表終了後には殆んどが退場しており、これではコンクール以降に残された出場校は気の毒という外はない。加うるに、コンクールに入賞せんが為の謡曲になるのを恐れるのである。先の委員会に於ても、従来の秋季大会を主とし、コンクールを従とする形式的な方式を改めて、コンクールを主とする方式にせよ、という案や、コンクールの内容を課題曲と自由曲の二部制にすべし（これについては以前から云われてきたが）という案が出た。個人的な意見としては、前者を採用することは余りにも淋しい限りである。形式的にならざるを得ぬかも知れぬがやはり秋季大会を主とすべきであろう。如何にしてもこの間の均衡がとれぬ様であればむしろコンクールを廃止すべきだと思う。後者の場合は、種々問題点を含むであろうし、各大学の事情により不可能であろうと思われる。然らば如何にすればよいかと問に対する、適切な回答を一緒に考えていたべき度いのである。

その二は月並会に関連した事項である。従来の月並会は単なる協会というに過ぎず、各大学間の実質的な交歓が殆んど行われていなかった。この点を改めると共に、講演等により内容の向上を図ろうとするものである。来年度の月並会には新しい方法が採用せられるものと思っている。

卒直に言つて、中入り後の劇的な場面以外はたいへんたいくつでしだ。だいたいにおいて言葉がきつぱり通じませんから内容がつかめない。動作だけでは、最初のうちはものめずらしくても、だんだん脳神経への刺激が弱くなってくる、そうなると思つて活動がにぶつてきて目も耳もさかたんで、さかんなるあくびによつても事態はますます進行する。（あくびは周知のように血液中の酸素量の不足を正そうとする自動調整運動です）……………

ざつとこういつた有様を呈していましたが、この傾向は本学に入つてからもつづいていました。というのも、謡を耳にしても、それに対して意識が働かだすということもありませんでしたし、又少しは働いたとしても、お経の類に入れてしまふぐらいなものでした。から、謡曲なんでもの（失礼ノ）はあつてもないようなものでした。実に私の世界には、謡曲は存在していなかつたのです。ところがこんな小生が謡曲への関心を懐くようになったのは、謡曲することの効用を誰からとなく聞いたからでした。謡曲をやっていると、はらができる、又謡曲はいい健康法だ、と言うことは小生にとっては大きな魅力でした。しばらくしてから、風韻会に属していききました。その時つてもらい謡曲がどんなものであるかを聞きにきました。その時の感じとしては、お経とは同類項ではないことがわかる程度でした。なにはともあれ、やつていくうちにわかるだろうと次の日から例の学生集会所へあがつて、チョコンと人のそばに正座して、謡いの本をみましたが何のことだかさっぱりわからぬ、その上にやりつけぬすわり方をしたためにすぐ足がしびれてくるものだから、やりきれない気持でした。とにかく何でも熱心な小生のこと？、つ

最後に、これは個人的には甚だ遺憾に思うのであるが、学連の諸経費調達のためにダンスパーティを催さんという件についてである。經常諸費用の不足は年間の諸々の行事を遂行する上に大なる障害となるであろうし、それを会費の値上げによつて補わんとするのは、各大学にとつて望まじからざるものである。かかる点に基きダンスパーティ云々の件が一部で主張せられてゐるものと推察せられる。一応は尤もであると考えられるが、学連の本来の性格を今一度考え直す必要はないであろうか。営利を目的として何かを行うことは、好まじからざる態度と云わねばなるまい。自分個人としてはむしろ学連会費の値上げの方法を探りたいと思う。

* * * * *
何かつまらないことばかり述べてきたが、学連の在り方について、もう一度考えていただければ幸いである。

かけだし

E 10 山本 閨 一

創刊号に藤井先生がおかきになつた先生の謡い生活の長い思い出、謡つて三十年に比して、小生のものはかけだし二年というかけのうすいものです。

はじめて能というものを観たのは高三の時で、船弁慶であつた。

づけてやっているうちに足の方も少々なれてくるしゴマも少しはわかつてくると、謡曲らしきものがわかつたような気がしておもしろくなつてきた。快い節まわしをおぼえたとたのしくなつてしまつて狂言みた様な声をはりあげて、ところかまわずうなつたものだから家のものは笑つてしまつた。

毎日昼食時に練習していましたが上級生がよく指導して下さいました。中下げを何回も何回もやりなおしさせられたのが今でも脳裏をかすめます。おかげで土蜘蛛の「色を尽して夜昼の……」の所が大好きになり、ピ声をはりあげてはうっとりとききはれたものでした。

とかくするうちに役をつけられる。やれる自信がないがはげます。一生懸命練習する、すこし上達する。それを指摘されると非常にうれしく思いました。適切な忠告とあたたかなおもしろいは小生をして、たのしいはがらかな日々へと更に更にかかりたてたのでした。

このようすばらしい環境にあれば誰だつて進歩し向上するはずです。しかしなぜ小生は上達しないのでしょうか。その答は簡単です。つまり練習不足なのです。小生はよくかぜをひきました（不思議なことには今年も一回）ので練習から遠ざかる機会が多く生じました。すこし遠ざかると、それが惰性となつて二、三ヶ月はすぐたつてしまいます。こんなことがつづいたのでは上達するわけがありません。上達しないと何だか恰好が悪くてうなる回数が増えてくる。

この悪循環が今までの実状でした。しかしこれは謡曲をたのしむという積極性を忘れていたがためとこのことに最近気付くようになりま

一昨年の晩秋に君にすめられて謡をはじめてみました。謡の世界は私には全く新しいものでありましたが、割合自然に入ってゆけたのはやはり何か普遍的なものがそこにあるからだと思えます。入部以来一年余り、割合に気ままに過ぎていただき、又四年生だというのでいろいろの会に出していただきました。まだまだ声もふしもうまくできませんが、それでも興味はだんだんとわいてきました。これからも細く長く続けたいと思っております。

謡と仕舞とわたし

L 11 松村喜代子

「時々ふつと思う。どうしてこんなクラブに入ったのだろうか」と。「それごらんない。妙なことを始めるからよ。魔がさしたのね。大体謡や仕舞の稽古なんて卒業してからでも、充分できるじゃない？何もよりによって大学時代にクラブ活動としてそんなのする必要ないと思う。大学生活でないといけない様な、今やっておかなく

ればもう駄目という様な、どういったらいいかな……せつぱつまったギリギリの所から出てくるものと取り組むといった、つまり若さをもつと有意義に使う方法があるでしょう」

「それは卒業してからでもできる事は確かよ。でも、そんな風言い切ってしまうから……大学時代にクラブ活動としてした事は、あなたのお稽古事とは本質的に違うと思う。その違うということはないと淋しい。私がこのクラブに入ったのは、魔がさしたからではないの。うまく言えないけれど、太陽の下をかけたまわっている子供達がひなたくさい様に、子供の頃から身近にそんなのがあったというところが、いつの間にかそれを身体の隅々にまでしみこませ、体臭にしてしまったということ。クラブとしてこんなのを選ぼうなんてカケラ程も思わなかったし、興味なんて全然なかったのに練習をしているのを見た時、理屈じゃなしに、身体がすっぽり包まれてしまった。だからといって、仕舞や謡が特別好きでもないのよ。謡を聞いているよりグリーの方がずっと楽しいもの」

「言う事はわかる様な気もするけれど、私には能楽等の現代における存在意義がわからないな。この間の舞囃子だって、但し、全然こんなのに知識のない人間が感じた事だけど、やっている人が楽しんでだけでしょう。それなら何も発表会なんて必要ないし、予備知識がないと眠いなんてのはどうも……芸術とはそんなものじゃないわ。時代が全然忘れられているし、みんなということもよ」

「能楽等古典芸術が現代不必要でないということは、それは色々問題はあるわけだけれど、私達が近代文学を自分のものにしようにと

思えば、しつかり万葉集を勉強しなければならぬのと同じだと思ふ。ちよつとエラソウナ事をいえばね、こういう事でしょう。私達がいわゆる古典を研究しなければならぬのは今日の人間生活に役立つ創造のエネルギー、あなたに言わせれば混迷せる現代の新しい方向を見出すエネルギーを掘り出す為でしょう。だから現在をどう生きるかに密接につながっているわけで……」

「でもそういうあなたは古い事を言ひ出すけれど、あの安保騒ぎで学校が休みだった時、ぬけぬけと全国大会だとか何とか言つて出て行ったでしょう。それにあなたは白樺派の文学を好きじゃないのではありませんか？よくこんなことをいったわ。自己は人類の意志の体现者である。だから自己を生かす事が人類の意志を生かすことになる」といった武者小路流の、国家とか社会の問題を全く切り捨てた樂天的な自己肯定は、それなりの意味はあつても、失うものの方が大きいってことを」

「それは……あの安保の時のことは今でも奇妙なしこりになつて残っているの。同じ学生なのに、能楽堂ではキチンと正座して謡をうたつてるし、外に出るとトポトポとプラカードをかついだ群が通るの。口では勇ましい歌をうたつているけれどそれがちつとも勇ましく聞えない。地方のせいもあつただろうけれど、みんな同じ学生だというのにこんなにはつきり別れなければならぬなんてみじめな気がした。そんな事を思つてばんやりながめている自分もみじめで可哀相になつて涙が心の底でこり固まつてしこりになつたよ。……他人のことを引き合いに出して言うのはイヤだけれど、そんな事を考えることすら放棄してしまつてる人がいるでしょう。わ

たしは考えることだけは、それだけは……」

「とも角、(クラブの感じについていかな) あなたのクラブの人は日本がどこを向いていようと、政治がどうあろうと、そんなことは知らん、明日のデートの天気が気になる。てな人が多いみたいなのがする」

「私はなまけ部員だから、みんなのことは殆んど知らない、全然といつていいくらい。知らないけれど、だけどそうかしら？そうみたいない気もする、でもそうじゃない……わからない。ただ、今の私に言えることは、クラブに入ったからには入つたらしくしないですうしようということ、もう一年程しかないけれど。ちよつとつらいのは、お昼休みに練習があること。講義を抜け出して映画に行つたりする私だけれど、二時間抜けるのは少々こたえるから」

「紅葉狩」の舞台

Ⅱ 戸隠山旅行記

E 11 井上文男

大学一年生の秋期試験が終わつたその日、僕達五人は夜行普通列車新潟行に乗り込んだ。この旅行は遠征マージャンの目的もあり、幸いにも一つのボックスを確保できた僕達は早速、持ってきた折畳式のベニヤ板製の台を膝の上において牌を並べた。けれども普通列車

の悲しき、京都以遠は各駅に止まる。その度毎に牌が倒れない様にそれをおさえねばならない。その上、横の男の手の内が見えない様に体をねじらせねばならないし、牌を混ぜ合せる時には静かにせねばならない。特に忘れられないのは夜中の三時頃、福井駅を離れる瞬間、列車が大きくガタンときた為、その場はオジャン。とにかく苦勞したマーシャンであった。

直江津で信越本線に乗換え、柏原で下車。先ず野尻湖へ行つたが雨の為、景色にも女性にも見放された。仕方なく駅にもどり、戸隠のバスに乗った。だが乗客は僕達五人のみ。車掌さんも年配の女性。不快指數極に達したのも無理はない。だがしかし、美は女性にのみあるのではない。やがて開けてきた美しい戸隠山を見て本当にこう感じた。大雑把に言つて女性美はミクロであり、自然美はマクロである。経済学においてはミクロの觀察の後マクロへと進むべきであるが、我々にはそういうわけにもいかない。

戸隠山は六甲山に似て屏風の様な感じの山である。頃は十月半ば。頂上には雪が積つていた。しかし中腹から裾にかけては濃緑色の絨氈を敷きつめた様で、そこへこちらから火の玉をパツと投げつけた様に紅葉が点在している。又、バス道路から山裾までの数百メートルの平地には緑葉樹と紅葉のおり為す美しさに加えて白樺の淡褐色のベールがこれを包む。幸いにして空は晴れ上り都会で見るのとはまるで違つたコバルト・ブルー色を呈している。こういった景色がバスの動くにつれて趣を異にしながら変化する有様はとも筆舌には尽し難い。自然の作つた見事な芸術品である。それを一語にして言えば優美であり、華麗である。従つて維茂が美人から

歪を受けたという物凄いとしか、神秘というか、そんな言葉は当らない。

しかし、戸隠は他面においてそれが当てはまるのである。というのは、僕は翌年にも戸隠を訪れた。今度は三人の旅で、長野駅から入つた。前年と同じ頃だったが、その年は暖かつたとみえて、未だ雪も真紅の紅葉もなかつた。山全体が濃緑色と淡褐色の曼陀羅模様の衣を着ていた。昼頃着いた僕達は時間の許す範囲、山に登る事にした。丁度日本シリーズ第一戦の日で、大洋が大毎を1-0で破つたのを登りながら聞いたことを憶えている。三原監督の声をブツンと切ると、その山の静かなこと。無気味であつた。静寂の中に身体ごと吸込まれそうに感じる。維茂は山の靈に當つて夢を見ていたのだとすれば、それは頷けることである。

戸隠山——それは信州にある数多くの山のうちの一つにすぎない。この他に僕は上高地・志賀高原その他の信州の自然に触れたが、戸隠のその独特な素晴らしさはいつまでも僕の心を去らないことだろう。

思ひつくまほに

E 10 山口久之

人間にとって一生懸命やつたことが認められないことは残念な

ことではない。認められなかったその瞬間には血が頭に上り、「カ」となるのが凡人の常である。しかしそのような凡人にも、「時」というものが妙薬となり、自分が無力であつたことを悟らしめ心を落ちつかせてくれるから不思議である。

謡曲コンクールの存在価値の有無は別として、昨年の学連秋季大会でのコンクールに際しては私達八人は私達なりに和気相々と練習に励んだものであつた。コンクールの前日には、一人一人が聞き手にまわつて注意しあい、力を合せば自分達も満更ではないわいと悦に入つたものであつた。しかし豈図らんや当日順位が発表されると最下位の十位であつた。「巴」御前、武者諸共に打死するという一幕にあひなつたのである。

出場十校が別々な曲種で競いあうのであるから審査委員の方々も並大抵のことではないであろう。ましてや一つ一つ批評するということは大変である。しかしながら例年のことながら今度の批評もごく簡単なもので納得のいくものではなかつた。

秋季大会の終了後先輩の原さんと全員で会場近くのすし屋に行つてすしをつまみながら、酒を酌み交しながら、煙草をくゆらせながらワイワイ騒いだものであつた。この時はじめていわゆるやけ酒、やけ煙草というものが苦くて辛いものであることを知つた。

しかし、当日苦笑していた自分であつたが、翌日はニヤニヤに変わり、年が明ければ、微笑に変わり、現在では先輩諸兄には申し訳ないが愉快にさなつてゐる。あの日のことがなつかしくしてしかたないのが今日この頃です。

「風韻」も今年で第二号を向えることになつた。「風韻」を発行するに際しては多少反対意見もあつたように思ひます。しかし次のような方向に「風韻」が進めばその存在価値は十分にあるように思われます。

世の中が落ちつくにつれて諺や能を愛する人が多くなり、現在神戸大学風韻会の現役生は三十名近くを数えるに至つてゐる。他方この風韻会は今年で創立三十年を向えることになつた。この間数多くの先輩諸兄が風韻会にその足跡を残して行かれた。この数多くの先輩諸兄と現役生を結ぶ橋渡しといへば今までは風韻会春季大会と秋季大会、他に一、二の会合があつただけのように思われます。しかもその会に出席される先輩たるや神戸近在の人で時間的に都合の良い人という如く極く限られた範囲でしかなかつた。日本の各地で活躍される先輩諸兄と現役生とを結ぶ橋渡しは実質的にはこれまで存在しなかつたといえましよう。この先輩諸兄と現役生とを全体的に結ぶ橋渡しを「風韻」がすればその存在価値は十分にあるように思われます。一端「風韻」が発行された以上今後も続けて発行されることと「風韻」が以上のような方向に進むことを切に願う次第です。

私は語をはじめてから今年で三年目である。語うというよりもドナルといった方が私の場合には当てはまるように思われます。このような私にも語には激しさの中にも静かき、静かさの中にも激しさがあるのではないかと思うようになって来ました。世に「動中の静」

つまり動処に静を得なければ性天の真境は得られないという言葉があります。語にもなにかこれに通ずるような「心」があるように思われます。この四月で私はいわゆるサラリーマンの部類に属することになるのですが、これからも語をつづけて、少しでも語の「心」を体得したいと思っております。

以上思いつくままに綴ってみました次第です。

昭和三十六年度 風韻会活動総括

三月

二十六日(日) 曇後雨 卒業生歓送会

於 六甲台学生集会所

惜春の卒業をされた十二名のために、宇治師範、藤井・荒川両先生。

四月

二十九日(土) 晴 第五回三大学交歓会

於 一橋大学本校

素謡 「屋島」、連吟「千手」 仕舞六番

東京在勤の中野泰男(B8)・長尾隆夫(B8)が応援にいられた。

五月

五日(金) 晴 関西学生能楽連盟月並会

於 関西学院学生会館

素謡 「巴」

月並会は意義のあることと思うが形態を検討する必要がある。

七日(日) 宇治風韻会

於 大槻能楽堂

有志数名が参加す。

十四日(日) 商大関学交歓会招待出演

連吟 「千手」 仕舞三番

十五日(月) 大学祭出演

連吟 「千手」 仕舞五番

二十八日(日) 奈良女子大学と交歓会

午後から小雨と相成り、楽しみにしていた六甲山ピクニックが流れになったのは残念であった。

六月

三日(土) 関西学生能楽連盟春季大会

於 山本能楽堂

素謡 「敦盛」 仕舞九番

なお合同で、能楽「土蜘蛛」狂言「船渡智」が演ぜられた。

原(B9)・植原(E9)が応援に見えた。

十日(土) 神大風韻会春季大会

まったくなごやかな会。

二十五日(日) 神戸女子薬科大学と交歓会

於 須磨幽仙閣

謡終わった後のミーティングが愉しいです。

七月

十一日(火) ↓↓十七日(月) 夏期合宿

於 高野山明王院

練習曲目は鶴亀・竹生鳥・嵐山・清経・忠度・放下僧・羽衣・鶉飼・天鼓・狸々・以上十番。

参加者は二十数名を数え、就中姫路分校顧問の和田先生、原(B9)・福光(E9)・山崎(E9)・上野山(B9)の諸先輩が避暑がてら来られた。

此頃は四年生の就職活動中で参加出来なかった人がおられたのは惜しまれる。

十月

三日(火) ↓↓六日(金) 秋合宿

於 六甲台学生集会所

三年生、四年生を対象としたものだが、低調だった。

十一日(水) ↓↓十三日(金) 文化総部主催グループダイナミ

ックス

十一月

十一日(土) 神大風韻会秋季大会

於 六甲台学生集会所

土曜日のことで先輩は福光、末広(E8)だけ。顧問の柚木(J)・古林(B)両先生がおみえになった。風韻会の顧問団の層の厚さを物語る。

三十日(木) 神戸大学第二回文化フェスティバル

於 神戸国際会館

新しい試みとして舞囃子「清経」「小袖曾我」を演じた。来場者にはかなりウケたようだ。

十二月

九日(土) 関西学生能楽連盟コンクール大会

於 大槻能楽堂

素謡 「放下僧」 仕舞七番

コンクール 連吟 「巴」

コンクールの結果は、誰が予想しただろう、最下位の十位だった。応援に来た原（B9）先輩はじめ全部員、全く頭に来た。南の寿司屋で酌めど酔わぬ涙の苦杯と相成ったが、「こうにスッキリしない。採点者三名自体にも再検討すべき点が多く残されているし、学生の謡の方向が小じんまりまとまったのを良しとするという方向に進んでいくような気がして、遺憾に思う。連盟でこのような点を議論してはどうだろう。今回のコンクールに関して云々する時、我々の「巴」がやや練習不足であったことを卒直に認めなければならぬ。入賞した神戸女学院の松風、関学の蟬丸、大阪市大の田村は素晴らしい。よく出来た連吟であったことを最後に付け加えておく。今日の完敗を機に現役部員の二層の練習を強く切望する。

二十三日（土） 謡納会

於 部室

◆ ◆
本年の我々は第六回三大学交歓会（五月五日・於須磨臨仙閣）、神戸大学風韻会三十周年記念大会（十一月・本学講堂予定）

を主備しなければならぬ。肉体的精神的経済的負担が重なるだろうが謡曲の練習を怠つてはならない。技術の進歩、チームワークの形成に最も有利な方法は合宿である。来年は合宿を四月上旬、七月中旬、十月上旬の三回を計画している。

昭和三十七年度予定

四月

〔九日—十二日〕 春季合宿 於 再度山大竜寺

〔二十九日（日）〕 関西学生能楽連盟月並会 於 関西大学

五月

〔五日（土）〕 三大学交歓謡会 於 臨仙閣

〔十四日（月）〕 第十一回神戸大学祭文化フェスティバル

於 神戸国際会館

〔下旬〕 奈良女子大・神戸大交歓会

六月

〔十日（日）〕 関西学生能楽連盟春季大会 於 湊川神社能

舞台

〔中旬〕 神戸大学春季謡会 於 姫路分校

〔下旬〕 神戸女子薬大・神大交歓会

七月

〔中旬〕 夏季合宿一週間 場所未定

八月

〔下旬〕 夏季合宿一週間 場所未定

十月

〔中旬〕 強化練習又は合宿

十一月

〔中旬又は下旬〕 神戸大学風韻会三十周年記念大会

於 本学講堂

十二月

〔上旬〕 関西学生能楽連盟秋季コンクール大会 大阪能楽会

館

三月

〔下旬〕 十一回生歓送謡会

第六回三大学交歓謡会

のお知らせ

一ツ橋大学、大阪市立大学、神戸大学の交歓会も、定

例行事となり、今年で第六回目をかぞえます。今会は神

戸大学が当番校に当り十一回生以下はその準備に忙し

く、練習に励んでおります。時を昭和三十七年五月五日

（土）、所を須磨栗岡舞台（神戸市須磨区関守町三丁目

三五）と決定致しております。先輩の皆さんにも、是非

御来場願ひ、舞台に演じコンパに興じて頂き、ぼくたち

現役の活動振りを御覧じて頂きたいと存じます。

神戸大学風韻会現役一同

先輩各位



編集後記

◆月日のたつのは早いもので、創刊号の校

正を手伝ったのがついこの前であったような気がするのであるが、はや第二号を発行する運びになりました。

◆一番心配していた資金も先輩諸兄の絶大な御援助を賜りまして準備が出来ました。

なにしろ、初めてお目にかかる人に寄附をお願いするのですから、恐る恐る言う始末でしたが気軽に寄附して頂いた上にいろいろと助言してもらった時の喜びはこの上もないものでした。

◆原稿の方に関しましては、当初の編集方針として先輩諸兄の原稿は少くとも全体の

六割を当てていたのですが、編集子の努力が足りないため、実現できなかったことをおわびする次第です。

◆第二号は当初の編集方針通りに出来上りませんでした。今後増々「風韻」が発展して行くことを切に願ってやみません。

第三号の編集委員も決っていますので色々御意見をお聞かせ下さることを先輩諸兄にお願いする次第です。

◆最後ながら「風韻」第二号の発行にあたりまして御支援を賜りました各位に心から御礼申し上げます。

(山口)

編集委員

永田 守男
左 鴻 秋 義
山 口 久 之
山 本 閔 一
前 田 紀 一 郎
久 下 昌 男
井 上 文 男

昭和三十七年三月十五日 印刷
昭和三十七年三月二十六日 発行

神戸市灘区六甲台町

発行所 神戸大学風韻会

印刷所 水三島紙工株式会社

電話大阪 931 一六七四八番